

平成 30 年 5 月 27 日

学都松本教育 100 年を語る会講座

100年前の先生の言葉－最近の若者は元気がない！

1 現代の学生は…単独には実に意気地のないように見える

別紙「澤柳政太郎のことば」参照

※松本出身、開智学校卒業生の澤柳政太郎（文部次官、成城学園創設者）

2 子守児童をして生涯無教育に終らしむるは実に惨酷

彼等多くの子守児童をして生涯無教育に終らしむるは実に惨酷、教師は最も同情を以て親切に之を導き世に子供の大切なること愛すべきことを知らしめ教育者自身も範を示して之を導かざるべからず（明治 30 年代か）

3 流行気分になり教育の本末を顛倒する嫌いはあるまいか

流行気分になり教育の本末を顛倒する嫌いはあるまいか。徒らに欧米教育の総べての形式だけ模して、主眼を没し、其の土地の風土、市街の広狭、発展、…運動場の有無如何を忘却しての施設は贅すべきではない。～徒らに組織立て形式を尊び欧米林間学校の縮図に習う弊は共に警醒すべきである。（大正 11 年）

4 各自互に主義を立て一校の世論を創出すべき

小学校令将に実施せられんとす、我等は此時に当り空しく黙視すべきときにあらず。出来得る丈は各自互に主義を立て一校の世論を創出すべきなり。

↓

（明治 25 年）

大人の思想を以て作りたる文章をそのまま生徒に注入せんとす無理の次第なり～上級に上るに従い自作文の割合を多くするを要す（作文の教授法についての職員意見書、明治 32 年）

5 唯ねがはくばこの細道を…

教育の道に分け入ってからまだ浅い年月の流れたばかりの私は重い荷物を背にしなごらほとほと草臥しかかっている旅人のようなものだ。何の定見もなく何の信念もない風羅坊にすぎない。

唯ねがはくばこの細道を歩みつづけて行きたいのだ（昭和初期）



澤柳政太郎の言葉

しかして**本当の教育**とは人間の本性と申しましょうか、児童の天分、さらにむつかしく申しますれば各自の持って生まれた特性才能を啓発して行く所にあると存じます。——しかし今日の教育は大人が大人の考えを以て、これも必要である、かく為すべし、かく為すべからず、ときめたものを児童に要求しすぎる嫌が極めて多過ぎると存じます。理想を組織的に哲学的に構成することはむつかしいが、砕けて申して見れば、立派な人、善い人、正しい人、親切な人になることです。世のため人のため邦のため人類のために考へ行ふ人となることに異説はない。——
私共はこの目的を達するのに、自然的の方法、児童の本性特性に教えられなければならないと信じてやっておるのです。

成城小学校創立10周年祝賀会での演説(昭和2年)より

また現代の学生は相集まっては衆力をたのんで多少の元気を示すけれども、単独には実に意気地のないように見える。

真に元気ある学生は千万人に対しても吾れ独り往かんとする概がなければならぬ。

要するに徳義に適い道理に合することは忌憚なく堂々とこれを主張することがあって欲しい。これを主張すると同時に、いやしくも道理に対し徳義に対しては絶対に服従する覚悟がありがたいものである。

「現代学生の屈従」(澤柳『隨感隨想』大正4年)より

ことにデモクラシーの高潮さるる今日の世界の中では多数ということが力である。多数は必ずしも道徳ではない。道理でもない。国政も公共団体の仕事も多数が第一である。これは一人の専制よりも過が少ないというまでである。道理と道徳の行わるべき学校には多数は価値少ないものである。

「成城高等学校の教育精神」(大正15年)より

大体論としては、その子の天分天稟をなるべく故障なく順当にのばすことができれば幸いである。幼少の時からその神経を痛く緊張させ、種々の外部的刺戟(しげき)を与えて過度の勉強をさせ、苦悶(くもん)あっても自ら訴うるすべを知らない可憐の児童を苦しめ悩ますことは是非避けたいものである。——

どうぞ子供を子供として考えて貰いたい。

「子供を子供としての教育」(『教育問題研究』大正10年)より

将来の平和は教育者の努力如何 にあると云ってよい。

「国家の新理想」(大正12年)より

教育者は大なる希望を以て平和の為人類の幸福の為に尽くさなければならぬ。—第一には各国民は其属する国の發達を目的とすると共に世界の發達を考へなければならぬことを深く且つ正確に青年に教へることである。世界の各国が一の連合国家となるのは将来のことであらうと思ふが道徳的に社会的に親密に結びつくようにならなければならぬ。人類は兄弟であるといふこと、各国は一つの家族を為しているといふことを力説することが大切である。

—各人は良き国民であると共に良き世界国民でなければならぬ。国家主義は国際主義に調和されねばならぬ。愛国主義は人類共愛主義と調和されねばならぬ。—国際主義と調和されない国家主義は斥けなければならぬ、他国を眼中に置かない愛国主義は拒否しなければならぬ。

世界連合教育会創立会議での演説(昭和2年)より

「教師も学生なり」といいたい。

教うるは学ぶの半との諺は吾等を
欺かない—

どうぞ日々の実験や日々得られるたくさん
の材料を十分利用するようにしたい。

教師は学生である。実験しつつあるものである。日々研究しつつあるものであるということを実現したい。

『教師及校長論』(明治41年)より

もし小学校で此の自学自習がよく行はれて児童に自学自習する力と、其の精神習慣が養成されたなら、
中等教育や高等教育は別に学校を設けず、生徒が自学自習して行けばよい。
もとより自学自習の為に図書館とか博物館とか実験室とかの設備は入るであらうが、今日の所謂学校は入用でなくなる。…
かかる時代が来ないに限らない。否その来ることを希望せねばならぬ。

「小学教育の特に必要なわけ」(『教育問題研究』大正10年)より